

播磨風土記郡別応神説話考

長 野 一 雄

『播磨風土記』は応神天皇の説話(天皇の行為が語られたり、名が利用されたりしている地名説話を、一応こう記しておく)が顯著である。『豊後風土記』と『肥前風土記』には景行天皇の説話が多い。しかしこの方は、「景行紀」の記事に基づいて作られていることが明らかである。播磨における応神天皇の説話は『記』、『紀』共になく、この点に『播磨風土記』の特異性の一つがある。先に私は、『播磨風土記』に応神天皇の説話が多いのは、土著する有力豪族・息長氏の意向によるものだと指摘した。本稿はその補遺として、郡別に調査を進め、先の論証を確かめると共に、不備を正し、新たに判明できた事実を記してみたい。

一 応神説話をもつ郡にみられる傾向

応神天皇の説話は、現存『播磨風土記』十郡のすべてに含まれているのではない。含まれるのは、飫磨郡・揖保郡・神前郡・託賀郡・賀毛郡の五郡である。五郡がもつ応神天皇の説話を表にしてみる。

郡名	数
飫 播	11
揖 保	18
神 前	6
託 賀	4
賀 毛	7

量が少ないのは、十分に取材が行なわれていないからかも知れないのである。

別の観点から考えると、飫磨郡・揖保郡の記事量が多いのは、国庁に近く、大和朝廷の支配が及びやすい上、山陽道と因幡国庁へ通じる主要道があつて、資料が集まりやすかつたから、と言えるかも知れない。

地理的観点から考察すると、飫磨郡は国庁の所在する播磨の中

表によると、飫磨郡・揖保郡に応神説話の多いことが明らかである。多いから、そこに何らかの作意を感じさせられる。しかし『播磨風土記』には、元来飫磨郡と揖保郡の記事が量的に多いから、応神説話の多いのも当然だということにもなり、軽々しくその作意を口にできない。

『播磨風土記』は未整備な状態であることが、秋本吉郎氏によつて指摘されているから、記事

心郡であり、揖保郡はそのすぐ西隣にある。いずれも主要道や主要河川に恵まれ、すこぶる交通の便がよい地域である。

今、秋本吉郎氏の古典大系本頭注を利用して、二郡内で応神説話の現在地がどこかが明確な場所を確認してみよう。

(饒磨郡)

麻跡里、賀野里、大立丘、安相里、砥堀、高瀬、射目前、

御立丘、伊刀嶋、阿比野、手沼川。

(揖保郡)

伊刀嶋、佐々村、金箭川、阿為、菅生山、邑智里、冰山、

櫛折山、意此川、御立阜、大家里、大法山、神嶋、桑原里。

以上の地の内、現在地を一応確認できるものを、概略の目星として、都合上本論の終りに略図を記し、丸印を付してみよう。

この結果、饒磨・揖保二郡の応神説話は、播磨国府周辺と、国府に近い市川や夢前川の沿岸と、播磨国府から揖保川沿いに、因幡国府へ通ずる主要道沿いの地に限られることになる。

他の三郡についてみると、神前郡では市川流域や、支流の岡部川流域にあり、それはまた和田山（豊岡・城崎へ抜ける分岐点）へ通じる道に沿う地点にある。同郡の生野などは市川沿いとは言え、きわめて遠い。託賀郡では加古川流域の福知山へ通じる道沿いにあるが、比也山や鈴堀山は西脇市周辺で、山陽道からは奥地にある。賀毛郡では加古川中流域や、その支流の万願寺川上流域や、下里川流域にあるが、万願寺川上流の上嶋などは、奥地へ入り込んだ辺境地にある。

以上によって、五郡にわたる応神説話は、川の流域や、主要道

の近辺に点在することが分かる。だからといって、必ずしも距離的に便利な地ばかりでなく、特に神前郡の生野や、賀毛郡の上嶋などは飛び離れて存在する。市川上流の生野迄に、現在の神崎町や大河内町があり、これらの地が無視されているのはなぜか。無雑作の中に何かいわれがあるのではないか。いや、選ばれた地である以上、きつといわれがあるに違いない。生野は好字だからと考えると、賀毛郡の奥江は好字と言えず、どうなるのか。

『播磨風土記』は郡司が中心になって選録されているから、答えるの鍵は郡司の側にあると考えるのが妥当であろう。一体、それは何だったのか、後々考えてみたい。

次に、五郡の全地名説話中、応神説話の占める比率を調べてみる。まず饒磨郡は、地名項目三十四の内十一が応神説話で三十二%弱。揖保郡は、地名項目六十九の内十八が応神説話で二十六%弱を占める。神前郡は二十一話中六話で二十八%強。託賀郡は二十一話中四話で二十三%強。賀毛郡は二十三話中七話で三十%弱となる。（饒磨郡英馬野のように、その中の小地名、射目前などは省いてある。）

以上をみると、応神説話の占める割合は、国庁の地が一番多いが、賀毛郡で多いのが興味深い。なぜなら賀古郡比礼墓の条で、景行天皇が印南別嬪に求婚した際、「賀毛郡山直等始祖息長命為媒而、詆下行之時」とあり、この『播磨風土記』が記述された時、賀毛郡の土豪であった山直が、息長氏の出身であることが明記されているからである。してみると賀毛郡の記事に、息長氏の血縁者が関係していることが推定できる。（土豪である郡司が、各郡

の風土記作成に大きくかわかることは、先の論で紹介した。

国庁の方針が応神説話を作ることにあるなら、十郡のすべてにそれがあつて当然なのに、五郡にしかないから、郡庁が主体的に
応神説話を作っていることは明らかである。郡庁が作る以上、郡
司が自分達の奉じる天皇を利することはありえよう。五郡の郡司
のすべてが息長氏だと言ひ切る資料はない。しかし何らかの利害
關係によつて、応神説話を作ろうとする有力な土豪・息長氏の意
向に同調することも十分推測できる。

ここで、その同調性を確認するため、五郡の応神説話の内容や
表記を分類してみる。とは言つても、応神と地名とが結合された
説話であるから、大なり小なり相似性をもつのが当然かも知れな
いが、それも幾らかの参考になる点はある。

まず内容的にみて総括すると、「巡行時のこと——国見その他
の行動・言動・天皇のしたことでない突発事。」「狩猟時のこと。」「
「応神の世のこと——天皇の直接・間接の行動。」の三種に分けら
れてしまい、それ以外に出るものがない。

次に表記上、天皇名の表わし方をみると、応神説話のある五郡
では、応神天皇はすべて「品太天皇」と統一表記されており、他
の天皇の場合は「(志貴)嶋宮御宇天皇之御世」(鎭磨郡)、「大長
谷天皇御世」(鎭磨郡)、「難波高津宮天皇」(揖保郡)、「難波長柄
豊前天皇之世」(揖保郡)、「大帯比古天皇之世」(揖保郡)、「難波
高津宮御宇天皇之世」(賀毛郡)とあり、「天皇之御世」「天皇之
世」「御宇天皇之世」などと少し相異なるが、基本はほぼ同一であ
る。

しかるに、応神説話のない他の五郡では、「大帯日子命」(賀古
郡)、「大帯日子天皇」(賀古郡)、「穴門豊浦宮御宇天皇」(印南郡)、「
「帶中日子命」(印南郡)、「難波高津御宮天皇御世」(印南郡)、「難
波豊前於朝廷」(讃容郡)、「近江天皇之世」(讃容郡)、「難波高
津宮天皇之世」(讃容郡)、「難波長柄豊前天皇之世」(穴禾郡)、「市
辺天皇命」(美養郡)とあり、賀古郡や印南郡のように同じ天皇に
ついてても表記が統一せず、印南郡と讃容郡のように仁徳天皇の表
記が相違し、讃容郡と穴禾郡のように孝徳天皇の表記が、「難波豊
前於朝廷」「難波長柄豊前天皇之世」と著しく相違する。

このようにして、応神天皇の表記のみは見事な統一がなされ、
他の天皇については、応神説話のある五郡はほぼ同一で、応神説
話のない五郡は恣意的で統一性が乏しい。

以上、応神説話のある五郡においては、郡司間で同調性がみら
れる。同調性は何もない状態で生れるはずがなく、そこになんら
かの關係があつたとみるのが自然であらう。

二 応神説話のない郡にみられる傾向

応神説話のない郡は、賀古郡・印南郡・美養郡・穴禾郡・讃容
郡の五郡である。

この五郡を地理的にみると、賀古郡・印南郡は山陽道に近く、
讃容郡は津山へ通ずる主要道を中心に存在する。さらに穴禾郡は
因幡国府へ通じる主要道を中心に存在するが、かなり奥地にあり、
美養郡はやや奥地にある。

この五郡の中から、注目できる事実を発見し、考察を加えてみ

まず、主要道に近い賀古・印南・宋木の三郡に、応神説話のないことが注目できる。このことは、大和朝廷の支配力の及びやすい地域でも、応神説話のない郡があることになり、応神説話の作成が、大和朝廷の支配とさして関係の薄いことを示している。

讀容都を調べてみよう。この郡には応神説話はないが、他の天皇の説話・神々の名が出る説話・土地の有力者名が出る説話は比較的多い。もちろんそうしたものは大なり小なり他郡にもあり、飭磨郡や揖保郡には特に多いから、これらをもつて、興味ある事実を発見することは困難である。

今、讃容郡に名の出る天皇名・神名・有力者名の数を表にあげてみよう。

天皇・皇后	数	神	天皇・皇后	数	有力者	数
息長帶日売命	1	玉津日女命	1	別部の犬・その孫	1	1
仁徳	1	(大神の姉妹)	1	稻狭部の大吉川	1	1
孝徳	1	広比売命散用	2	苦編部の遠祖・大	1	1
天智	2	都比売命の弟	2	仲子	1	1
天武	1	弥麻都比古命	2	九部の貝	1	1
		神日子命	1	道守臣	1	1
		大神(出雲)	1	伯耆の加具漏・因	1	1
		大石命	1	幡の邑由胡	1	1
		(大神の御子・玉				
		足日子・玉足比				
		売命の生める子)				

天皇	皇后	皇子	名数			
			景行	賀古		
			3	数		
聖德太子	仁德	息長帶日女	仲哀	成務	景行	印南
1	1	1	1	1	3	数
				於奚・袁奚	履中	美囊
				1	2	数

このような推測を強く抱かせる事實は、他にも発見できろ。

南・美濃の三郡の説話量は少ないから、未整備だったととれる

が、天皇說話数をみるとやや考えさせられるので、表にしてみる。これによると、印南郡などでは応神說話がないにしては、意外に他の天皇の說話が多い。他の天皇の說話が八話もあるのに、応神說話がないのは意外な感があるのである。そしてこれはやはり応神を奉ずる氏族がいなかったからではないかと推定する。

賀古郡をみると、景行天皇の出る三話に限られている。この内の二話は印南の別嬪に求婚した時の說話で、最初の二話は十三の地名を含み込む比較の長い說話である。景行天皇に関する說話は、印南郡にも三話があり、その内一話は、印南の別嬪に求婚する說話である。

志我高穴穗宮御宇天皇御世 遣九郎臣等始祖比古汝茅^一令定^二國堺^一 爾時 吉備比古 吉備比亮 二人参迎 於是 比古汝茅 娶^三帶吉備比亮 生兒 印南別嬪 此女端正 秀^二於當時^一 爾時 大帶日古天皇 欲^三娶^二此女^一 下幸行之 別嬪聞之即遁^二度件嶋^一 隱居之 故曰^三南毗都麻^一

この說話は天皇順位に錯誤があり、津田左右吉の指摘する二者⁽⁵⁾ 一对の神話の表現パターン、「吉備比古・吉備比亮」があり、求婚されて島に逃げ渡り隠れていた、などというユーモラスな誇張表現があり、いかにも作られた感が強い。

周知のように、景行天皇と印南の女との結婚は『記』『紀』にもある。『記』では、「吉備臣等之祖、若建吉備津日子之女」となっており、紀では単に播磨稻日大郎姫となっている。印南郡の說話は、九郎臣等の始祖比古汝茅と吉備比亮との子ということで相違はあるが、子供は女親の家系との結合が強いから、吉備氏が景行

天皇と印南の別嬪との婚姻伝承を保持し、自己を皇室と結びつけている公算が強い。「別嬪」と「大嬪」との相違はあるが、吉備氏がかかわっていることに変わりはない。

してみると、賀古郡・印南郡で景行天皇の說話を作っているのは、吉備氏ではないかと推定できる。景行天皇を奉ずる吉備氏が、応神天皇を奉ずる息長氏と同調できないのは当然である。また別に、争いとまではいかなくとも、播磨国内で土豪同士の利害上・意見上の対立があったかも知れない。あつて当然なのが人間社会である。景行說話のある二郡が、歩調を合せたように応神說話を含まないのは、そうしたことも推測させる。

応神說話のない郡の一部には、他の天皇を奉ずる氏族がいることを推定したが、安禾郡の状態は(天皇說話でなく神の說話だが)その推定を更に確かにしてくれる。

『播磨風土記』には合計九話の天日槍說話があるが、安禾郡はその内六話までを保持している。天皇說話の方は孝徳の一話である。応神說話をもつ郡でも揖保郡に一話、神前郡に二話の天日槍說話がある。しかし数が少ないから、この二郡は天日槍を重んじているとは言いがたい。安禾郡は出雲系の葦原志許乎命や伊和大神の名もよく出るが、多くは天日槍との土地争いを語る說話である。天皇說話が一つしかなく、神の說話の多い特色がある。伊和大神や葦原志許乎命を奉ずる出雲系の氏族の存在も考えられるが、出雲系の神は他郡にもきわめて多いから、何とも言えない。そこで安禾郡に天日槍說話が多いのは、「応神記」に出石神社の神々やその神宝を語るきらびやかな說話を入れている出石氏が、天

日槍神を信奉しているからだと考え。つまり、安永郡には天日槍を信奉する出石氏の一族が、土豪として存在しているのだと思う。多分そのせいで、応神説話は不要だったのだ。この点前論で応神天皇と天日槍をすべて同一次元で処理したことを、訂正しておきたい。

地理的にみると、天日槍説話は近接地に固まらず、揖保川とその支流に沿う安永郡一帯に点在している。それは鰐磨郡や揖保郡の応神説話の点在の仕方と似ていて、土豪の作意が強いと言えるかも知れない。

以上、応神説話のない郡には、別の天皇を奉じたり、自己氏族の祖霊神を奉じたりする氏族が、土豪として存在することを推定した。

三 天皇説話中応神説話しかない郡の傾向

応神説話を含む郡の内、鰐磨郡・揖保郡・賀毛郡は他の天皇の説話をも含むが、神前郡・託賀郡は応神天皇の説話しかない。天皇は応神だけだが、神々や土着者の名は他郡と同じように出るから、余計に気がかりである。このことは特異点として注目できるので、問題にしてみた。

神前郡・託賀郡が応神天皇以外に含む神々や土着者の名を表にしてみる。まず神名をみると、神前郡では「建石敷命」「大汝命」「小比古尼命」「伊和大神」「阿遲須伎高日子尼命」等、出雲系の神が多いが、出雲系の神は揖保郡・讃容郡・安永郡・賀毛郡にも多いので、なんとも言えない。託賀郡では、播磨国内で奥津嶋比売

神 名		話 数		土 着 者	
伊和大神	2	1	2	佐伯部等の始祖阿我乃古	
建石敷命	1	1	1	百濟人(等)	
大汝命	1	1	1	的部(等)	
小比古尼命	1	1	1		
阿遲須伎高日子尼命	1	1	1		
天日杵命	1	1	1		
伊与都比古命	1	1	1		
宇智賀久杵豊富命	1	1	1		
玉依比売命	1	1	1	明石郡大海の里人	
道主日女命	1	1	1	播磨刀売	
天目一命	1	1	1	丹波刀売	
宗形大神(奥津嶋比売命)	2	1	1	氷上刀売	
伊和大神	1	1	1		
讃伎日子神	3	3	3		
建石命	3	3	3		
花波神	1	1	1		

を奉ずる宗像氏同族の賀茂氏(古典大系本頭注)が、有力者として目につくが、応神天皇との因縁が発見できにくい。神前郡の土着者として、「佐伯部等始祖 阿我乃古」というのは注目できる。この説話は、応神天皇巡行の時、随従した阿我乃古が多駝の里の地の下賜を願ったというもので、説話そのものが自己氏族と応

神天皇とを結びつける内容を含んでいる。この佐伯部については『姓氏錄』（右京皇別下）に、「応神天皇播磨巡行のみぎり、青葉が流れてくるので、人がいるのかと伊許自別命に尋ねさせたところ、日本武尊の蝦夷平定により、東国から連行された俘人が住んでいると分り、「宜き汝を君治す之。即賜氏針間別佐伯直。」とある。これによって、佐伯直が応神天皇との因縁を語る伝承をもつことが確認できるから、佐伯氏が神前郡の応神説話の作成にかかわっていることが推定できよう。

このことから、息長氏以外にも応神天皇を奉じる氏族がいる実態が判明し、これらが同調していることが分る。
神前郡・託賀郡がもつ意味について、更に別の角度から考察し

てみる。

この二郡の天皇説話は、応神説話に限られている。このことは、天皇説話を入れることが郡庁の自由であり、国庁の統一方針はなかったことを示している。第一章では、郡庁が主体的に応神説話を作成していることを指摘した。ここでは天皇説話全体が、郡庁の自由な裁量下にあることを確認しておこう。

四 出雲系の神々と応神説話

『播磨風土記』には出雲系の神々の説話も多い、播磨の国全体についてみると、天日槍説話などを上回る数がある。今、各郡について表してみると次のようになる。

饒磨郡	揖保郡	讃容郡	穴禾郡
伊和大神の子（阿賀比古・阿賀比売） 大汝命と子（火明命） 大汝命と妻（駕都比売） 大汝少日子根命 日女道丘の神	伊和大神（4） 大汝命 阿菩大神 伊勢都比古・伊勢都比売（伊和大神の子） 少日子根命 石竜比売命（2） 出雲御蔭の大神 少足命 葦原志拳乎命 石竜比古命	伊和大神（4） 伊和大神の妹妹 玉津日女命（讃容郡比古命）（2） 広比売命（2） 玉足日子命・玉足日売命 大石命	伊和大神（11） 葦原志許乎命（4） 阿和加比売神 許乃波奈佐久夜比売命

神 前 郡	託 賀 郡	賀 毛 郡	美 囊 郡
建石敷命(伊和大神の子) 大汝命 小比古尼命 阿遲須伎高日子尼命 伊和大神	宗形の大神(奥津嶋比売命)(2) 伊和大神 建石命	大汝命(3)	玉帶志比古大稻男・玉帶比売 豊稻女 八戸挂須御諸命

() 内は説話数 () のないのは 1

応神説話との関係を考えてみる。応神説話のあった飭磨・揖保・神前・託賀・賀毛の五郡には、いずれも出雲神説話がある。応神説話の一番多かった揖保郡は、出雲神の説話も同じように多い。しかし又、応神説話の多かった飭磨郡は、出雲神の説話が少ない。一方、応神説話のなかった讃容郡・安禾郡・美囊郡にも出雲神の説話がある。特に安禾郡には、伊和大神や葦原志乎命の説話が極めて多い。

更に交っているのは賀古郡・印南郡である。この二郡は応神説話もなく、神々の説話もない。応神以外の天皇の説話と、土着者の説話とがある。この二郡は記事量が少ないから、それが原因かも知れない。しかしそれにしても、神々の説話が一話もないのは、この二郡が地理的に隣接しており、第二章で記した景行天皇の説話との関係ともあいまって、一部に同調性が感じられはする。一部にといたのは、景行天皇の説話と神々の説話とについてであって、賀古郡には景行天皇の説話しかないのに、印南郡には景行以外の天皇説話が八話もあるから、全面的に同一歩調とも

言えないからである。

以上の結果、応神説話と出雲神説話とは無関係な存在であることが分る。ということは、応神天皇の奉戴者と出雲神の信奉者とは、対立関係が見られず、出雲神を奉じている者が、大和朝廷の体制内に融和していることが理解できる。出雲神と天日槍命との土地争いの説話があり、出雲系の氏族と出石氏との土地争いのあった史実が推測されるが、出雲系の氏族と応神天皇を奉ずる氏族との対立はなかったことになる。おそらく歴史的次元が違うのであろう。

地理的に見ても、飭磨郡・揖保郡で出雲神説話の存在する地点は、応神説話の存在する地域と相違しない。また山陽道に近い賀古郡・印南郡には出雲神説話がないし、この二郡より更に摂津に近い美囊郡に二話がある。とにかく、賀古郡・印南郡を除いては、応神説話のように同調性が乏しい。神前郡の建石敷命を、託賀郡では建石命と表記し(これは作成時の表記そのままと言ってしまうが)、讃容郡では伊和大神を大神とのみ表記し、安禾

郡では伊和大神と葦原志許乎命とを同神の別名として表記している。したがって郡間で統一性がなく、恣意的扱いを受けている。それだけにまた天皇説話と違い、土地の信仰とかかわっているから、土着の伝承である感も受ける。しかしそれが地名説話となったとき、机上の創作が加わる可能性もあり、簡単にきめつけにくい。『播磨風土記』が地名説話としてもつ伝承性と創作性については、別稿を用意したいと考えている。

以上この章では、出雲神説話が応神説話と併存して対立状態にないこと、出雲神説話は応神説話と違い、郡により恣意的に扱われて統一性がないこと、特に賀古郡・印南郡は応神説話と共に出雲神説話をも含まず、更に他の神々の説話もなくて同調性が感じられ、第二章で指摘した景行天皇を奉ずる吉備氏がいて、一部歩調を合せていることの傍証がえられることを指摘したい。

五 応神・景行以外の天皇説話の分布

応神・景行以外の天皇・皇后・皇子の郡別分布表を示してみる。応神説話のある郡で、他の天皇説話のある饒磨・揖保・賀毛の三郡をみると、いずれも仁徳天皇の名がある。他に饒磨・揖保の二郡で息長帯比売の名があるが、他に一致する名はない。

一方、応神説話のない郡で、他の天皇の説話のある郡をみると、印南・讃容の二郡で息長帯日売と仁徳の名が一致し、讃容・安木の二郡で孝徳の名が一致する。

また応神説話のある郡とない郡とを通して比較すると、印南・饒磨・揖保・讃容・賀毛の五郡で仁徳天皇の名があり、印南・饒磨・揖保・讃容の四郡で息長帯日売の名がある。更に揖保・讃容・安木の二郡で孝徳天皇の名があり、賀毛・美濃二郡で意美・袁美二皇子の名がある。

印南郡の成務・仲哀・聖徳太子、饒磨郡の雄略・欽明、揖保郡

仲哀 息長帯日女命 聖徳太子 景行 仁徳 成務	印南	欽明 息長帯比売命 雄略 仁徳	饒磨	仁徳 安閑 推古 宇治の天皇 大帯日売命 孝徳 息長帯日売命 景行	揖保	孝徳 息長帯日売命 天智 天武 仁徳	讃容	孝徳	安木	意美・袁美 仁徳	賀毛	伊射報和気命 於美・袁美の 天皇 市辺の天皇	美濃
--	----	--------------------------	----	--	----	--------------------------------	----	----	----	-------------	----	---------------------------------	----

の宇遲和紀郎子・安閑・推古、讃容郡の天智・天武、美濃郡の履中の名が各郡で孤立して存在する。この内二説話をもつ欽明・天智・履中は同一郡内にのみある。

以上の結果、応神説話のあるなしに関係なく、他の天皇説話の存在することが判明する。特に応神説話のない讃容郡に、応神天皇と直系の皇后や天皇があることから、そのことが明らかである。応神説話のある郡の他の天皇名をみると、饒磨郡の雄略や欽明、揖保郡の安閑や推古、賀毛郡の意美・袁美二皇子等が、応神天皇から隔たりにすぎた存在で、応神天皇を奉じる氏族との関係を強調しにくい。

したがって、応神天皇を奉ずるとみた息長氏が、他の天皇についても、息長氏との系譜をもつ天皇を重視して、説話を入れていたとした『国文学研究』第六十一集の私の指摘を訂正しておきたい。

六 朝鮮系渡来人説話と応神説話

『播磨風土記』に多い朝鮮系渡来人の説話と、応神説話とのかわりを考えてみる。

今、郡別に渡来人説話数を示してみる。渡来人説話の中に天日槍説話を入れるべきであるが、別扱いにしたので括弧内の数でそれを示しておく。

一見して、応神説話のある郡でも、朝鮮系渡来人の説話は託賀郡・賀毛郡になく、饒磨・揖保・神前の三郡だけにあることが分る。また、応神説話のない賀古・印南・讃容・安禾・美濃の五郡には、安禾郡の天日槍説話を除いて、朝鮮系渡来人の説話がない。

賀古	印南	饒磨
0	0	6
揖保	讃容	安禾
5(1)	0	0(6)
神前	託賀	賀毛
1(1)	0	0
美濃		
0		

猪養野 右号「猪飼」者難波高津宮御宇天皇之世日向肥人朝戸君天照大神坐舟於猪持参来進之可飼所求申仰仍所賜此処而放飼猪一故曰猪飼野

とあり、「朝戸君」が渡来人であるとは記していない。しかし説話は、朝廷に居住地を願ひ出て許可された内容をもっている。それは史実ではなくても、後から来た渡来者が先住者に許可されて住み着いた事実が、大和朝廷の支配意識で説話化されたものと考えられる。

こう考えた上で考察を重ねると、まず、渡来人説話を入れることも国庁の統一方針ではないことが確認でき、結局は郡庁の任意によることが分るのである。そして次に、応神説話を入れている五郡庁も、渡来人説話を入れることについては、同一歩調でないことが分る。もちろん資料が未整備であることは考慮に容れる必

以上の事実は何を語るのか。

朝鮮系渡来人が、饒磨・揖保・神前・安禾の四郡にしか居住していなかったと考えることは、現実的でない。賀毛郡に「猪飼野」の地があり、これは現在大阪の生野区にもあって、古くから朝鮮系の人々の居住している地として有名である。元々「猪飼」は渡来人のもたらしたものと考えられるのである。賀毛郡の「猪飼野」条には

要がある。しかし賀毛郡などは、応神以外の天皇説話を二話、神々の説話を七話、土著者の説話を八話も持っており、渡来人の説話を軽視した感がある。

上田正昭氏は渡来人説話の多いことに注目し、「朝鮮系渡来人とその関係伝承が数多く筆録されるにいたったのも、百濟系の渡来氏族楽浪河内の存在を抜きには論じえないであらう。」と記している。この意見については、国庁のあつた飭磨郡についてのみはそう言え、揖保郡が国庁に同調しているとする、この二郡はそう言えるかも知れない。宋禾部の渡来人天日槍説話は、出石氏の意向であることを指摘した。

以上によつて、応神説話と朝鮮系渡来人説話とのかかわりは、特にないと言えよう。ということは、応神を奉じることと、渡来人を重視することとは別問題であつて、渡来人と郡庁や国庁の官人との人的つながりの強い郡のみが、渡来人説話を重視していると言ふことにならう。

七 ま と め

指摘が多岐にわたつたので、重要点をまとめてみる。

『播磨風土記』では、応神説話を含め、天皇説話全体が国庁の統一方針をもたず、郡庁の裁量に任されている。応神説話のある五郡間で、応神説話の扱いに同調性がみられる。またその五郡中に、息長氏系の山直（賀毛郡）や、応神天皇を奉ずる説話をもつ佐伯直（神前郡）があり、先の論の指摘から、息長氏を中心にして、血縁上・利害上のつながりが五郡にあると推定できる。この

ようなつながり故に五郡は歩調を合せ、その郡内に応神天皇の巡幸にともなう地名説話を作っているのである。それらの地名説話をもつ、応神への尊崇意識は、『記』『紀』の応神伝承にみられる、応神を神格化した意識と似ている。

応神説話のない郡では、賀古郡と印南郡に景行天皇を奉じる吉備氏がいること、宋禾郡は天日槍を奉じる出石氏がいて、共に応神説話と同調していないことが分る。

応神説話の作成は、大和朝廷の支配とさして関係がないことも分つたが、同時に『播磨風土記』に多い出雲神説話も応神説話と無関係で、郡により恣意的に扱われ、両者が融和して存在している。

応神以外の天皇説話や、朝鮮系渡来人の説話もまた、応神天皇を奉ずる氏族と無関係に存在し、特に後者は渡来人と郡庁や国庁の官人との、人的つながりの強い郡に存在することが推定できる。

注(1) 津田左右吉『日本古典の研究上』一八一頁。上田正昭

『日本古代国家成立史の研究』一〇六頁。

(2) 『国文学研究』第六一集『播磨風土記の天皇説話』

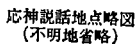
(3) 秋本吉郎『風土記の研究』二二四頁〜二七四頁。

(4) 吉野裕『風土記』三八〇頁。

(5) (1) と同著。一八七頁。

(6) 播磨地方に吉備氏が存在し、その伝承が日本武尊説話の形成に関係していることは上田正昭氏の指摘（『日本武尊』）があり、そのことは古典大系本『日本書紀上』二八二頁が紹介している。

(2) に同じ。



昭
52
·
3
一
文